

課題の1	パプリカの接木による半身イチョウ病対策調査（新規）
------	---------------------------

近年、当センターのパプリカやナスなどで散見されるようになってきた半身イチョウ病は、土壌を介して感染するが、罹患すると葉の黄化や茎の維管束が褐変することで生育が大幅に遅れ着果不良をひきおこし、減収となる。

パプリカやピーマンの接木用台木は青枯病や疫病に耐性があるが、半身イチョウ病に効果のある台木は販売されていないことから、青枯病や疫病に耐性のある台木を利用し、有効性の有無を検証する。

1 調査内容

(1) 栽培環境：ビニールパイプハウス

(2) 供試品種：

台木：台パワー（農研機構）、バギー（タキイ種苗）、タッグ（横浜植木）

穂木：パプリ娘レッド、パプリ娘ゴールド（丸種株式会社）

区分	対照区	調査区①	調査区②	調査区③
台木	－	台パワー	バギー	タッグ
穂木	ゴールド	レッド、ゴールド	レッド、ゴールド	レッド、ゴールド

※パプリ娘レッド、パプリ娘ゴールドはともにレッド、ゴールドと表記（以下同じ）

(3) 耕種概要

①播種日：台木2月18日、穂木2月28日

②接木日：3月25日（鉢上げ4月9日）

③定植日：5月7日

④栽植様式：畝幅210cm（床幅90cm）、株間50cm、1条植え

栽植本数 95本/a（952本/10a）

⑤ 施肥量：

施肥量（成分量 kg/10a 当たり）				
肥料名		N	P	K
基肥	スーパーエコロング 413(100)	4.9	3.9	4.6
	ロングショウカル(140)	4.2	0.0	0.0
	有機アグレット 816	4.9	0.4	2.4
	けい酸加里	0.0	0.0	14.0
	パワーリン	0.0	7.5	0.0
基肥計		14.0	11.8	21.0
追肥	追肥専用 S646	0.8	0.2	0.8
	たまご化成 S555	0.8	0.8	0.8
追肥計		1.6	1.0	1.6

※施肥量は、土壌分析結果を基に算出した

※施肥前に苦土石灰を全面散布した

※トミー液肥（ブラック）を6月15日から生育状況に応じて適宜施用した

⑥ 収穫：7月26日～10月23日

⑦ 調査項目：台木ごとの半身イチョウ病の発生状況

2 生育状況

（1）半身イチョウ病の発生状況

半身イチョウ病については、対照区で、定植から約2か月経過した7月8日に症状が見られ始め、調査区では、7月25日に調査区③のうち、タッグ+レッドで、9月19日に調査区②のうち、バギー+ゴールドで症状が見られ始めた。

その他の調査区では、半身イチョウ病の症状は見られなかった。

（2）病害虫発生状況

病害については半身イチョウ病以外は薬剤防除により発生しなかった。

害虫についてはスリップス、オオタバコガによる食害がわずかに見られたが薬剤防除により収量や品質に大きな影響を与えるものでは無かった。（農薬散布状況は表1参照）

図1 定植直後



図2 罹患した株（左、中）と正常株（右）



図3 罹患した株の果実（右）



図4 罹患した株の根（右）



表1 農薬散布状況

散布月	散布回数（農薬成分名）	防除対象病害虫等
5月	殺菌 1 回（TPN 1 回）	うどんこ病
	殺虫 1 回（アセフェート 1 回）	アブラムシ、スリップス
6月	殺菌 3 回（フルジオキサニル 1 回、TPN 1 回、ボスカリド 1 回）	灰色かび病
	殺虫 1 回（クロルフェナピル 1 回）	スリップス
7月	殺菌 2 回（イプロジオン 1 回、TPN 1 回）	灰色かび病
	殺虫 2 回（ペルメトリン 1 回、チアメトキサム 1 回）	コナジラミ、スリップス、アブラムシ
8月	殺菌 3 回（メパニピリム 1 回、ペンチオピラド 1 回、ピラクロストロビン・ボスカリド 1 回）	灰色かび病 うどんこ病
	殺ダニ 1 回（シフルメトフェン 1 回）	ハダニ
	殺虫 5 回（ジノテフラン 1 回、ピリダリル 1 回、バチルス・チューリンゲンシス菌の生芽胞および産生結晶毒素 3 回）	スリップス、オオタバコガ
9月	殺菌 2 回（TPN 1 回、炭酸水素カリウム 1 回）	灰色かび病 うどんこ病
	殺虫 4 回（アセタミプリド 1 回、ピリフルキナゾン 1 回、バチルス・チューリンゲンシス菌の生芽胞および産生結晶毒素 2 回）	アブラムシ、コナジラミ、オオタバコガ

3 調査結果

台木別の半身イチヨウ病罹患率は、対照区（接木なし、ゴールド）が40%（2/5本）、調査区①（台パワー）が0%（0/14本）、調査区②（バギー）、調査区③（タッグ）とも7.1%（1/14本）となった。（表2）

半身イチヨウ病に罹患した株の収量については、収穫前に発生した対照区（ゴールド）2本の収穫個数はそれぞれ9個、13個、調査区③のうち、タッグ+レッド1本は12個と大幅に収量が少なかった。生育後期に発生した調査区②のうち、バギー+ゴールド1株は収穫個数が32個であり、ゴールドの平均収穫個数32.2個と差はなかった。

表2 台木別半身イチヨウ病罹患率

	栽植本数	罹患本数	罹患率（%）
対照区（接木なし）	5	2	40.0
調査区①（台パワー）	14	0	0.0
調査区②（バギー）	14	1	7.1
調査区③（タッグ）	14	1	7.1

《参考》 品種別収量

	1株当たり平均 収穫個数（個）	1個当たり平均 重量（g）
ゴールド	32.2	84.8
レッド	38.0	75.1

4 まとめ

本調査から、接木なしの対照区に比べ接木苗のほうが、半身イチヨウ病の罹患率が低かったことから、接木苗が有効であると推測できる。

次年度は、対照区と調査区の栽植本数を揃え、再度半身イチヨウ病に対する台木の耐性を調査するとともに、台木別の収量についての調査を行う。